

太虚 -ブルックナー生誕二〇〇年-

メタデータ	言語: 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2023-12-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須永,恆雄 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000222

太虚——ブルツクナー生誕二〇〇年

須 永 恆 雄

一

「歴史はブルツクナーの人物像を、殆ど希代の学び手、として我々に伝えている。いなる巨匠と雖も、学びに終りのないことを証してはいる、とはいえことブルツクナーの示したものは、導かれない、という斯くも長つづきする強烈な意志にほかならず、彼はまさしく自立しないことをこそ求めているのではないかと察せれるほどなのである。もとより彼にあつては、学び手がじっくり時間を費やして一歩一歩上達してゆくといい、謂わば中世的な正確さへの欲求が、免許皆伝の暁にマイスターと呼ばれることへの欲求が、その活力のもととなつていたともみえる——
恰も責任は他者の手に委ね、自身が成熟して強さを獲得したことを自ら見定めるのみならず自ら感じ取ることには殆ど自信がもてないかのようであつた」とアウグスト・ハルムはそのブルツクナー論を説き起こすが、作曲家でありまた音楽研究にも携わつたハルムのものとしたディアベッリ変奏曲論には、この曲の謎に唯一迫り得たものとしてかの口

マン・ロランが称賛を惜しまなかった。

また編集者として批評家としても名を馳せたドイツ自然抒情詩の詩人オスカル・レルケは、四十年来にわたって親しんできたというこの楽人に捧げた珠玉の小著を、その生の淵源する地の叙述から始める。「ドナウ川の南の低オーストリアの城邑ヴァルゼー近くを流れるとある小川を、往古の昔から一本の橋が渡っていた。この橋に因んで、アン・ブルックナーに直系の最も古い父方の祖先は、〈己の地所の橋のほとり〉というほどの意味のイエルク・プルークナーという名前であった。イエルクは一四〇〇年頃の生れである」と述べた後、しばらく来歴に筆を費やす。即ち、橋作りの職人たちの多くがフランケンからの流入者であったらしいこと、以来何世紀にわたって近傍の諸集落に住み着いて、先ずは農夫として、後には食堂や旅籠を生業として、はたまた桶屋に、石工に、その他諸々の職種に就いたこと、中にはまた出世して役所に職を得る者も出れば、その中には貴族に列せられるところまで昇進を遂げた者もあったこと等々。家系の中で初めて上オーストリアに生を享けたのがヨーゼフ・「アントン・」ブルックナーで、すなわち楽匠の父親であった。一族は故郷の地で重なる戦禍、民衆の反乱蜂起やトルコ襲来、またペストや天然痘などの疫病の蔓延、等々を堪えて生き延びたのである。「騒乱、呻き、叫び、哄笑などが、時の奈落の底から沸き起こって響いて来るのが聞こえてくるかもしれない」、ただし同じ聴覚に訴えるものではあっても、斯かる阿鼻叫喚、「それを慰め或いはそれに抗う、楽の音を一音たりとも耳にすることはしない、そのような音をこの一族が見出しでもよかつた筈の一音たりとも」と、深い淵から響く嘆きを鎮め或いはそれに堪える糧を齎す筈の音、つまり音楽を見出す者は奇しくもこの家系にただ一人として出てこなかったことを訝る。訝ると言わないまでも、ブルックナーの音楽が硬い岩盤を穿ちつつ延々と続く遅々とした作業を俟つてようやく現れ出たものであると暗示するような記述とあってよいか。「響きへと浄化された創造への接近が起こったのはブルックナーの祖父によってのことだった、――

とは言う条、ただただ接近したまでのことではあつたが」。桶屋の修業を積んだにも関わらず教職への憧れ已まず、窮乏をもともせず十六歳の若者はリンツへ向かい、助教の長い境遇を耐え抜いた末にようやく、リンツから二時間余りも離れた寒村アンスフェルデンに学校教師の職を得て定住した。「その長子アントンが父の仕事を継ぎ一八二三年にテレジア・ヘルムと結婚したが、彼女は官吏の娘で、シュタイア地方の裕福な商人の出身であつた。テレジアは一八二四年九月四日に息子アントン即ち我らが巨匠を、十一人の子供たちの長子として産み落したのである」。

斯くしてこの世に一八二四年に生を受けたアントン・ブルックナーの、生誕二〇〇年を来年に迎えるにあたって、先ずはその生涯の始まりから音楽の都ウィーンへ辿り着くまでを、即ちこの誉ある帝都へ辿り着く手前まで、楽壇の渦中に巻き込まれるその手前までの時期をつぶさに見て行きたい。生誕の日から概ね月毎に諸事を追うこととするが、年次は必ずしも網羅が叶うとはかぎらない。

一八二四年九月四日四時十五分にヨーゼフ・アントン・ブルックナーはアンスフェルデンに生まれ、午後五時にカール・グッテンターラーに抱つて洗礼を施される。代母は大叔母のロザリア・マイアホーファーである。洗礼名簿にはこう記されている：「九月四日朝四時十五分生、夕刻五時受洗。カール・グッテンターラー ヨーゼフ・アントン・・・」

少し後の時期のものであるが、洗礼証明書の文面がゲレリヒの伝記に再録されている…

「アントンすなわち、当地の学校教師アントン・ブルックナー氏とその妻テレジア、旧姓ヘルム、兩人の婚姻による

息子は、一千八百二十四年の九月四日に、ヴォルフエルンの司教館の食堂女主人である代母ロザリア・マイアホーファー嬢、ザンクト・フロリーアンの司教座聖堂參事正規会員であり且つ又当時の助任司祭ヨーゼフ・グッテンタ「ー」ラー神父様、両人の立ち合いの許に誕生し、カトリックのキリスト教の慣習に従って洗礼を受けたことが、当司教座洗礼名簿に記された署名人に拠って確認されたもの也。／アンスフェルデン、一八四〇年。／司教座聖堂參事会員、主任司祭、／ヨーゼフ・ゼーバッハー」

この後はアントンに引き続き次々と兄弟が生まれるが、その内の少なからぬ者たちが早々に命を落として成年まで生き永らえるのは少数であった、当時の事情を窺わせる記録が残るのみで、当の一月のものとしては一八三六年一月一七日の日付が、その前の年から師事していたヨハン・バプティスト・ヴァイスの作曲した昇階唱の自筆楽譜がブルックナーの遺品の中に残されていたことを以て嚆矢となす。

Hahn, August: Die Symphonie Anton Bruckners. Hildesheim/New York 1975. S.9.

Loerke, Oskar: Anton Bruckner, ein Charakterbild.

<https://www.projekt-gutenberg.org/loerke/bruckner/chap002.html> (2022.12.12 トマヤス)

http://www.ablat/Datenbank_Scheder/Bruckner_Chronologie.php (2022.12.13)

Goellerich, A.: Anton Bruckner. Bd.I, S.54

Chronologie.1Bd. S.24

Goellerich, A.: A.B. Bd.II/1, S.341

二

ブルックナーの書簡全集の中で二月のものの嚆矢は類友ルドルフ・ヴァインヴルムに宛てた一八六〇年二月二五日付けのものとなる。書き手は既に三十台半ばにかかっていた。

「最愛の友ヴァインヴルム！

二月二日にウィーンで君に会えるのは大満足だ。とはいえ著者のゼヒター教授は病気に違いない。

そう考える理由は僕の二回にわたる手紙に返事を呉れなかったからだ。僕宛ての先生のこの前の手紙は今年一月十三日付けだが、そこにもるかぎりごく健康でおいでで、僕の勉強課題の結果をしたためて下さったのだ。お願いだから大急ぎで！ 訪ねてみてくれたまえ、先生のお住まいは、マリアヒルファー大通り十三番地三階だ、今すぐに行ってみてくれたまえ、心からお願ひする、そうして先生の様子を僕に知らせてくれたまえ、もし可能ならば、そうして僕がお伺いする許可をいただいて来てくれたまえ…即ちそうなったら間髪を容れず僕はウィーンへ行くからね。先生の御手に接吻しますとお伝えしてくれたまえ、同じく先生の奥様にもだ。意地悪しないで。すぐに返事をくれたまえ。皆さんによろしく。もういちど心からお願ひを籠めて、アロイスと僕から心底から御挨拶申し上げる、

君の友

リンツ、一八六〇年二月二五日。」

アントン・ブルックナー

この文面で言及されている師ゼヒターの手紙とは、即ち一月前つまり一月の二三日付のもののことである…

「親愛なる友ブルックナー！」

貴殿の二重対位法に関する学習を記した一七冊の帳面を通覧しましたが、まさに貴殿の勤勉には、またここに貴殿が成し遂げた進歩には、然るべく讃嘆を惜しまずにいられません。個別の意見は口頭で申しませう。しかし貴殿が健康を保つてウイーンへお出でになれますよう、私は貴殿がなお御自愛下さり、必要な休息を取られんことをお願いするものであります。もとより貴殿の勤勉と熱意を確信しておりますれば、貴殿が御自身の過大な精神的苦勞によりよもや苦痛を蒙るようなことがあつてはならないと心得ます。と申しますのも、貴殿ほどに勤勉な生徒は絶えて今以てなかつたと申し上げることを片時も怠つてはならないと感ずるものだからです。

さらにこう申上げて貴殿には御安心頂きたいのですが、今後に続く勉強は、今までのものがそれ自体としては多くの無味乾燥などところを含んでおりそれにも関わらず貴殿はそれを克服されたのですが、それに比べてずっと快適なものとなりませう。何より先ず貴殿には健康を保ち続けられることを願っておりますから、再度御忠告致さねばなりません、くれぐれももう少し休息をお取りくださいませように。

家内から親しく御挨拶申し上げますとともに私からもよろしく。

お元気で過ごしてくださいませう、また私が貴殿と共にありますことに全き満足を味わっておりますことをお忘れになりませんよう。

一八六〇年一月十三日。

貴殿の

帰依したる友

ジーモン・ゼヒター拜」

さらにその前のゼヒターの書簡…

「親愛なる友ブルックナー！」

貴殿のお便り嬉しく落手いたしました、と申すも、貴殿の内なる御好意と信頼とをあらためて認識したからであります。ただちにお返事認めるべきところ、そう出来ませんでしたのは — 今年はもう三度目となりますが床に就かざるを得なかつたからであります、十月三十日の日曜以来、私は外出できず家に籠っており、今朝になってようやく床を離れることが叶いましたが、今週いっぱい外出は許されません。体が冷えると激しい胃痙攣に襲われ、お医者様の治療でそれが首尾よく和らげられるとはじめてほっと一息つけました。

経過句の解決に関する貴殿の疑念に就いてですが、こう申上げて貴殿に安心していただいで差し支えありません、当該のものに就いて貴殿が看做したとおりのことに対して私から異を差し挟むところはひとつもありません、諸経過は規則正しく進行して、基底音を下からあてがうことを心得ているので、より明晰な光を当照ることが出来ているといつてもよろしい。即ち貴殿が a + の例で示されたとおりであります。またさらに申せば、七度経過音が属音七度なのか、それとも別か、ということも同様です。ちなみに、これらの例に於て経過句が本質的なものではないと看做してもどうにもなりません、私はむしろ、これらの例の規則正しさを新たな基底音によって明らかにする方を優先したい。そうすればどんな場合であっても正当化されるからです。

貴殿がその後になされた勉強成果を私に送って下さるおつもりなら、よろこんで拝見しましょう、そして書面でお来るところまではそれについて申し上げます。

田舎に住んだことがないものですから、ただ時にふれ折にふれて半日ほどのちよつとしたハイキングに出かけたことしか私どもにはありません。

家内からもよろしくと申しております。

貴殿に対する私の好意の変わりなきことを確約しつつ失礼致します

ウィーン、一八五九年十一月三日、

貴殿の

忠実な友

ジーモン・ゼヒター

追申 今日でちょうど私が宮廷オルガニスト就任の教令を受けて三六年になります、まさにそれだけの齢を私のまだ存命の結婚した娘が重ねたことになりました」ブルックナーが師事するゼヒターは、嘗て死を目前にしたシューベルトが求めて師事したことでも知られる楽理の大家であった。

A.B.Brief. 1.Bd. S.17, S.16

Chronologie. 2.Bd. S.371f. S.324f.

三

ブルックナーがジーモン・ゼヒターに学ぶべくウィーンに出かけるのは降臨節と四旬節の頃の年二回のことであつた。今年の四旬節は、二〇二三年二月二日から四月六日までがそれにあたっているが、概ね三月を中心に前後数日にわたる期間を包摂する。

ウィーンでゼヒターに教を乞うことを勧めたのはローベルト・フューラーであつたことを一八八八年の大学の講義の途中にブルックナーは思い出話として語つたという。数多の都市の様々の修道院でオルガニストとしてまたミサ曲の作曲家として活躍し、また様々の学校で教鞭を執る遍歴の旅を重ねて当時、即ち一八五五年のことであつたが、フューラーはザンクト・フロリーアンに逢着したのであつた。元々ブラハの生れで、洗礼時の代父でもあつた聖堂オルガニストのヴィタセクに作曲とオルガン演奏の手解きを受け、時に応じて師の代役を務めてオルガンに向かつたこと屢々、十九才にして師の奉職するファイト大聖堂で第二オルガン奏者となり、なおかつ合唱隊の少年たちの指導にも当たつたが、二三才で同地ブラハのストラホフ修道院のオルガニストに採用され、翌年には師の後を襲つてファイト聖堂第一オルガニストの地位に就くと共に新設されたブラハ・オルガン学校で教職に就いた。三二才にして師の逝去と共にファイト聖堂楽長の座に就く等々とん拍子の出世ぶりであつたが、半ば強いられた結婚が裏目に出て酒に溺れ詐欺を働く羽目に陥り、六年後には楽長の地位を失う。妻子から離れてウィーンへ赴くものの又ブラハに舞戻つて、その頃フューラーはシューベルトの第二ミサ曲を自作と偽つて公刊を企てたが、シューベルトの兄フェルデインントの慧眼でこれは直ちに発覚して醜聞となる。その後様々の地を渡り歩く遍歴を重ね、その間の活動場所

は、ザルツブルク、ミュンヒェン、アウクスブルク、フライジング、エッゲンフェルデン、はたまた奇しくも後にヒトラーの生地となるブラウナウ・アム・イン、グムンデン、フェックラブルック、ヴェルス、そしてザンクト・フロリアンに至ると、ここでブルックナーを指導するに及んだ次第。因みに遍歴は此処で終わりを迎えたわけではなくリンツ等を経て最後はまたウィーンに終わることとなる。

「『彼はいろんな課題を出したものだ』、と先生は一八八八年の大学の講義の最中、和声論のとある問題に際して回想された」とゲレリヒは伝記中に記す、「『私は』、と先生は続けられた、『五十年代にはもうきちんと音楽を学び終えていたから、まさに今の時代に一人前の音楽家たちが独り立ちして行うように行っただけだった。するとあのフューラーはそれにバツを付けて抹消したから、私は際限なく腹が立った。――音楽理論とやらは、まあ、上オーストリア人の得手ではないということだ。エンスの我が師ツェネッティみたいな人なら、たしかに、なにがしか寄与するところもあるだろうか。この方は今現在も――八十歳代だが――真に矍鑠として、ザンクト・フロリアンまで歩いてこられるのだ。』」ここに言及されたツェネッティとは、とどめ難い知識欲と尋常ならざる勤勉さのかたまりのようであった若き日のブルックナーが、近傍であるのを幸いに、その座所エンスマまで熱心に通って教えを請うた師で、その地でオルガニストと合唱指揮者を務めていたが、その和声学の見識の深さと広さは余人の追隨を許さぬ境地に達していたとされる。この人物との出会いは、病膏肓と称してはばからないほどのモーツァルティアーナであることを自他ともに認じていたツェネッティが大切な祝祭日の折にはザンクト・フロリアンを訪れて合唱隊と共にヴァイオリンやチェロを奏でることを好んで登場した場面にブルックナーが接したことに始まる。斯くして週に三回、この〈音楽術のバチエラー〉すなわち中世以来の学位獲得者同等を自認する弟子は、作曲家としても敬愛する師匠を尋ねるべく古式ゆかしい古都へと徒歩旅行を励行したのである。日曜日ともなれば、世にも稀なる勤勉を以て鳴

る弟子が、午前の授業時間を了えてクロインシュトルフまで帰路を戻りかけたところで、科された課題をただちに仕上げて、またその日の夕刻には再びエンスに姿を見せる、などということも稀ならずあったというが、それもまさしく彼の敬愛私淑する師の判断を一刻も早く仰ぎたい一心から出たことであつたか。斯かる親密な子弟の結びつきからは、まもなく長足の進歩が齎されたが、「ピアノ演奏、オルガン演奏、しかし就中、通奏低音」の分野に於ける進歩が著しかった。生涯ブルックナーはこの貴重な学恩を忘れることはなかつたという。のちに自身も老年にさしかつてから、首都でそれなりの声望を得て故郷に錦を飾る訪問を果たすに及び、父親のように指南して呉れた若き日の恩師を足繁く訪れたが、嘗ての学習の日々に師の未来を予見する眼差しはリンツの聖堂オルガニストとして弟子の姿を思い描いていたという。

さてザンクト・フローリアンでのローベルト・フューラーの話に戻れば、ブルックナーの課題解答を否定してこんな発言をしたという、「ねえ、ブルックナー君、二度から第五度に行くときには、反進行をとるものなのだ。君はウィーンに出かけてゼヒターの許で厳密な音楽上の規則を習いたまえ」と。こう言われてブルックナーは不安を抑えられなくなった。斯くして自作の口短調ミサ〈ミサ・ソレムニス〉を携えてゼヒターを訪ねることとは相成つた。初めの内は二年間ほど、課題と仕上げた解答とを郵便で遣り取りしたが、以降はブルックナーがウィーンに出向くことになった。『当時の私の作品の中で表現したことの多くに就いて、私は申し開きが出来ない』と先生が語られたのは一八五五年のことだった」とゲレリヒは伝記に記す。「ミサ曲をマイア司教の就任式の為に作曲して、司教がそれをお聞き下さって、こう仰つたのだ…ああ、トンネアル「アントンの愛称」、君は是が非でもウィーンのゼヒターの所へ行かなくちゃなるまい！ — このままでは君の為にならない、と。 — すぐさま然るべき教本を下さって、斯くして〈厳密な勉強〉の為にゼヒターの許へ赴き、このミサを持参したのだ。その本の対位法の勉強は私の氣に

入って、彼は私を生徒にとって呉れたのだ。」ところでこのゼヒターにシューベルトが楽理の教えを請うたことは先月号にも触れた。死の二週間前のことで、最初で最後の一回きりのレッスンとなったが、同行したのが一八二四年にウィーンに引越してきて偶々近くに住み親しくなったヨーゼフ・ランツで、シューベルトは作曲するとすべてを彼に見せる間柄となっていた。シューベルトは和声学はともあれ対位法の学習を求めた由、これも亦、ブルックナーと思えば相通ずるところであったか。

一八二八年三月二二日にテレジア・ブルックナーが生まれるが、母の名を貰ったこの妹は僅か十四か月後に身罷っている。

Goellerich. A.B. BdII/1, S.187, S.184ff./Bd.I. S.218f.

Chronologie:Bd.2 S.136/S.62/S.241/Bd.I. S.22

https://www.academia.edu/31415403/_Studying_with_Sechter_Newly_Recovered_Reminiscences_about_Schubert_by_his_Forgotten_Friend_the_Composer_Joseph_Lanz_in_Music_and_Letters_88_2_May_2007_226_265 [20230206 access]

四

一八二五年四月一日には、一家の次男となる筈の、アントン・ブルックナーの弟が天に召されたが、キリストが最後の晩餐で弟子の足を洗ったことから洗足の日とされる聖木曜日に当たる前日、即ち三月末日に生まれたばかり、したがって僅か一日しかこの世に留まらなかったことになる。

一八三一年四月二一日にはアントンの祖父ヨーゼフが八一歳で長逝。詩人レルケに言わせれば音楽の周辺に一族の中で初めて近づいた人物であった。戦乱や疫病等々の奈落から沸き起こる阿鼻叫喚、その騒乱をいっかな聴覚に留めることなどなかったから、また楽の音に救いを求めることも亦ついでなかった、斯かる一族中で、聖なる音響の創造にこそ手を初めずとも、それを遙か高みに仰ぎ見てひそかな憧れを抱いたかもしれない。オーバーエスターライヒ「高オーストリア」に根を下ろして学校教師を生業とすることがこの人から始まったが、これが子と孫にまで三代にわたって受け継がれることとはなつたのである。楽匠の祖父の父つまり曾祖父の代まではブルックナーとPの字に綴る名でニーダーエスターライヒ「低オーストリア」はアムシュテッテン近傍のエートで桶屋を営んでいたという。一七七五年三月に五九歳で身罷り、享年五九歳とされるから生年は遡つて数えると一七一六年となるが、その妻テレジアは同四九年の十一月二三日から二四日にかけて双子を出産、ヨーゼフとカタリーナと名付けられた。曾祖父つまりその父の名を継いでヨーゼフと命名されたつまり祖父は、十六歳になるまでは家業を継いで桶作り職人として働くが、その年に、転じて教職の道を志し、その為にリンツで六週間にわたる教職コースを修めることが必要であつた。彼と同じ名を引き継いだ息子、この両ヨーゼフは親子二代、合わせると八十年間にわたって教職に従事することとな

る。アンスフェルデンの司教座戸籍台帳には彼すなわち祖父ヨーゼフに就いて、「一七七六年からアンスフェルデンの学校教師を勤める、ニードーエスターライヒはエートの、旅籠の亭主であり且つ桶職の親方の息子である桶職人は、一七五〇年頃の生れで、一七七七年八月四日に、アンスフェルデンの学校教師の娘フランツィスカ・クレツツァーを娶り、一八三一年四月二二日に老衰で没す」と記されているが、一八二三年に息子に職を譲るべく五八年間勤めたその職を完全に退いた。

一八三二年十一月二四日に父アントンは、教会宛書簡（一八三四年三月一日付）に拠れば、「トラウン圏アンスフェルデン教区教会の執務部署」に二五グルデンの金額を納めて毎年ヨーゼフ・ブルックナーの命日にミサを奉納することにしたが、これは残された祖母フランツィスカを慰める為であって、祖父ヨーゼフの知友や子供達から資金を集めてミサの挙行に携わる司教をはじめとする面々に配るとともに剰余の十六クロイツァーは教会への寄付としたという。

教職の正装に身を包んだこの祖父の肖像画をブルックナーは生涯大切な遺品として、爾余の家宝と共に保持していたという。因みにその他の家宝の内には、白の繻子の驚くほど小さな靴があったが、それは母親が婚礼の儀に履いていたものという。他にはまた、丸いインク壺、蠟細工の聖母像などがあり、これは父アントンをすでに虜にしていたものであった。後者はすなわち夏休みを過ごすのがお定まりだったザンクト・フロリアン修道院のブルックナーの居室に飾られていたという。

因みに曾祖父舗ヨーゼフに就いてエートの過去帳には、ジードルブルク（低オーストリアのポスト・ヴァルゼー）の洗礼簿から引いたこととして、「ヨセフス・ブルググナー」とその名を呼び、「一七一〇年生まれ、一月三十一日洗礼を受け」と記し、両親として、ウーアファール出身の桶職人ゲオルク・ブルググナーとその妻カタリーナと名を示

している。また最後に代父として同じくリンツはウーアファール出のヨーゼフ・デイルンファーとスザンナの名を挙げる。伝記作者ゲレリヒは、これを根拠に、我々がブルックナーは上オーストリアにその根を有すると主張している。

エートの洗礼簿に拠ればまた、ヨハネス・ブルックナーなる人とその妻カタリーナ・キーベルガリンが一七二七年六月二十日に子供を設けたが、ヨハネス・ミヒャエリスと名付けられた。この家系からの出自に当たるのがおそらくヨハン・エファンゲリスト・ブルックナーで、この人は一八五三年頃にアンスフェルデン教区はベルクで学校教師となっている。数多くの教会音楽を旺盛に生み出し、その内には二〇曲のミサ曲も含まれる。その筆跡は奇しくも楽聖アントン・ブルックナーのものに酷似しているという。この人の筆跡で記された一八五六年一月二日の日付のあるオルガン曲の一冊が、ブルックナーの遺品中に認められたという。

さて我が楽聖ブルックナーに辿り着けば、第一子の長男が父の名を貰うのは、素直な両親にはままあることで例に事欠かないが、それを踏襲してアントンと命名された。愛称はトンネアル、元氣溢れるとは言いながら、そんな陽気さを内に秘めた子供であつたらしい。当時の田舎学校教師の家庭のつましい境遇に、いわば風雪に耐え困苦にめげず育つたが、そこには父親の細心の心遣いが伴っていた。一方また、激しやすくたちまち厳しく当たることも珍しくなかつたといえ、飽くことなき善意のかたまりでもあつた母親の指導もあつたとか。子供が泣き出すと、父親がスピネットと和音を奏でて慰める習いだつたという。愛情あふれる母親の心情に子供はそっぽを向くことはなかつたといえ、時として彼女は「甚だ熱く」なつて激昂することがあつたから、そんなとき父親は、叱られた子供に向かつて、「おいで、トンネアル、ちよつと外へ行こうか — 母さんは今、少々御機嫌斜めだからな」と語りかけて、部屋から連れ出してくれる、というのがお定まりであつたとか。

父アンTONは天性の屈託なく明るい性格の持ち主で善意の化身のような人であったらしい。とはいえ高い理想を掲げてそれに邁進するたちでもあった。その能天気な樂觀主義は、妻の健全な周到さに拠って幸い能く補佐されていたが、また妻の方はと言えば、いささか猪突猛進のきらい無きにしも非ず、とはいえ常に敬虔な莊嚴さを求めるところに欠けていなかった。TONネアルは活発な野生児の面目躍如、なんの拘束もない自然の中を駆け回って大地の上に大の字に身を投げ出しては、都会の「文化」なんぞに縛られる気配もなかった。天然自然の聖なる息吹を失わない、泰然自若の大自然のあらゆる恵みに委ねられて幼少期をすごした次第の由。

http://www.abilat/Datenbank_Scheder/Bruckner_Chronologie.php (2023.03.02 アクセス)

Goellerich.Bd.I.S.59. S.73ff.

Chronologie. 2.Bd. S.101

五

一八四五年の五月二七日と二八日を教員試験の期日とする旨、リンツの枢機卿会議で決定された。それに拠ると教育管区の監督官は、遅くとも五月二三日までに該当する候補者の書類をリンツの当該部局へ提出すべく求められている。この知らせがエンスの司教区内で回覧に付されたのは、五日の月曜から九日の金曜日までの週日であったが、ブルックナーもこの回覧を目にしていたに違いない。

ところで時間を少々遡ると、アントン・ブルックナーの堅信礼はリンツの旧大聖堂にて一八三三年グレゴリウス・ツイーグラウ司教に拠って執り行われたが、代父をつとめたのは従兄の音楽家ヨハン・バプティスト・ヴァイスであった。翌々の早春からアントンはヘルシングのヴァイスの許に赴いて音楽の修業を始めることとなったが、その地で学んだものは、ハイドン、その弟ミヒャエル・ハイドン、とりわけ後者の《トッカータとフェルセット》、モーツアルト、ヒュッテンブレンナー、アルブレヒツベルガー、またヘンデルとバッハ等々であったことが知られている。勤勉な弟子は御褒美に師匠から、ハイドンのへ短調変奏曲の初版楽譜を頂戴したという。

なおこの頃つまりヘルシング時代からのブルックナーの蔵書として『ドイツ言語論』が残されているが、一八二二年ウイーン刊行とおぼしき、盛大に書き込みがなされて表紙など数葉が欠けた熟読の形跡著しいものという。

また、ほぼ一年が経過する頃には四旬節の歌曲を、ヘルシングの、ニコラウス・ルンメル作になる当地のオルガンで弹奏して褒められ、ヴァイスから一グロッツシエンの報酬を得たという。その年の初夏には、ヴァイスの作品《タン・トゥム・エルゴ》に日付をブルックナーが記しているが、与えられてその楽譜を学んだものか。同じ三六年の秋には

前奏曲、さらに四曲の前奏曲を作曲して、これらには現在では作品番号が付されている。

翌三七年の夏のはじめには、次号に触れる事情に抛り、新任教師ヨーゼフ・ハメトナーが着任、いままでブルックナー一家が暮らしていた旧宅に引越して来ると、長男アントンは、以後しばらくの間、音楽修行に通っていたヴァイスの許に引取られて住まうこととなる。方や母は爾余の子供たちを伴って父アントンの姉妹であったアンナ・マリア・ブルックナーを頼って、そのエーベルスベルクの家へ引越したが、この人は盲目であったという。同七月末にアントンは母たちの住まいを訪ねて来て一週間ほど滞在した。

この時期から一八四〇年まで、ザンクト・フロリアン修道院のアウグスティヌス合唱隊に参加することとなるが、引き続きリンツの予備校に通って教員資格準備に備え、ヨハン・アウグスト・デュルンベルガーの許で和声学とオルガン演奏に勤しむ。

一八四一年の夏にザンクト・フロリアン修道院長宛にシュヴィングハイム司祭から来信あり曰く、ヴィントハークの夜の火事では、旧校舎は辛うじて「生き延びた」と。その秋からのブルックナー就任のことに關しておそらく遣取りがその前後にあったものとみえる。斯くてめでたくその学期はじめからアントンはヴィントハークに助教員として職を食むこととなった。学校校舎は家屋番号七番、ブルックナーの「住居」は二四番であった。前任者フランツ・フックスは年俸十二グルデンで遇されていたが、ブルックナーは学校と教会での職務の他に野良仕事もこなさなければならぬ。ブルックナーの枕頭の壁には所謂「ブリュンのマドンナ」とも称される「黒いマドンナ」の絵がかかっていたが、後にこれはシュタイアの医師ウルリヒ・フツラーを経て伝記作者のゲレリヒの手に期することとなった。

ヴィントハークでブルックナーが取り組んだのは、《フーガの技法》、アルブレヒツベルガーの前奏曲とフーガ、及びマールブルクの《通奏低音と作曲の手引》であったが、それと並んでリンツのパウスペルトル・フォン・ドラッヘン

タールなる普通科学校長の講義を聴講しての記録とおぼしき二一八頁から成る手書きの帳面が残されているという。

一八四二年末にザンクト・フロリアン修道院長アルネートはヴェイントハークを訪れて、訪問先の教師フランツ・フックス、また同地の司祭からブルックナーの態度振舞い即ち彼らに言わせると「不従順」の角での苦情を聞かされる。その結果アルネートはブルックナーをクロンシュトルフへ移すことを考えるに至る。明けて四三年正月二三日付でクロンシュトルフに於ける予備教員雇用令が教育区長にして監督の任にある低ノイキルヒエンの司祭フォアブナーの名の下に発せられた。斯くて新任の地に赴いたブルックナーは前任者レーホーファーと同じ旧校舎に居住するが、ここでようやく恰も家族に取り囲まれたような快適な職場を得たのである。この地での足掛け二年の間にはさまざまなかけがえのない出会いがあり、音楽好きの富農フェーダーマイアはスピネットを供与し、シュタイアの司祭ブレルシユは彼の地の教会でオルガンを弾くことを許し、男声四重唱を結成する機会に恵まれてその為に古巣ザンクト・フロリアンに戻るのであった。なかでもエンスのツエネッティに師事出来たことは多大の恩恵を齎し、週に三度この師に詣でるのがかけがえのない喜びとなった。

自作の、即ちかつて師ヴァイスの同名の楽譜に自らの手で日付を記したことがあったがそれと同じ歌詞《タン・トゥム・エルゴ》の作曲を含めて、諸作がこの地にこの時期に生まれているが、一八四五年の五月十二日の聖霊降臨祭の月曜日に、クロンシュトルフの教師フランツ・ゼラフ・レーホーファーが業績証明書を発行することとなってそれには諸々の貴顕も署名を連ねる。

「業績証明書

アントン・ブルックナー氏は、クロンシュトルフ司教区学校の補助教員であるが、同氏の着任時即ち一八四三年一月二三日以来現在に至るまで常に、授業に於ける倦むことなき勤勉を通じて、また子供達への愛情溢れる世

話を通じて、教会音楽の適切かつ肯綮に当たる扱いと熱意を通じて、また甚だ品格ある模範的な生活態度を通じて、まさに傑出しており、これを以て斯かる申し分なき業績を証明するもの也。

クロンシュトルフ、一八四五年五月十二日。

フランツ・ゼラフ・レーホーファー、学校教員。

ヨハン・ゲオルク・ラツチュグナー、目下の地区教育区監督。

ミヒヤエル・ローゼントリット、裁判官。

マティアス・ミューベルクフーバー、裁判官。

John, ゲオルク・マイアーイェルク、裁判官。

以上、当地地区委員会に拠り完全に正しいことを確認する。

ザンクト・フローリアン地区委員会御中

一八四五年五月十二日。

ルッケンシュタイナー、地区委員」

Goellerich Bd.I S.277

Chronologie. 1.Bd. S.42

http://www.abl.at/abl/_bruckner.php (20230406 トムヤク)

http://www.bruckner-online.at/?page_id=1928 (20230407)

https://de.wikipedia.org/wiki/Schwarze_Madonna (0407)

<https://www.hampel-auctions.com/a/Die-schwarze-Madonna-von-Bruenn.html?a=79&s=203&id=78829> (0407)

六

一八三七年六月七日の水曜日にブルックナーの父親は「肺疾患と全身衰弱」のため邑落アンスフェルデンで身罷る。その日の内にブルックナーの母親はヨーゼフ・ゼーバッハー司祭の推薦状を携えて修道院長ミヒャエル・アルネートを訪ねるべくザンクト・フローリアン修道院へ向かった。ゼーバッハー司祭の文面には、「今日の早朝三時四五分に当地の学校教師アントン・ブルックナーは聖なる終油の秘蹟を受けた後に亡くなりました。・・・寡婦が身寄りなき五人の子共たちと共に高邁なる恩寵を授けられんことを願うものであります」。

オスカル・レルケの珠玉の小著を暫く辿つてこのくだりを見ると、

「一八三六年の秋にその子アントン・ブルックナーは、不治の肺の病にかかった父親の諸々の職務を世話するためにアンスフェルデンに戻らなければならなかつた。一八三七年の夏に父は身罷つた。司祭と共に息子は終油の秘蹟を執り行つたが、すると彼は心痛の余り失神して頹れてしまつたのである。それともあまりに大きな訣別の奇跡が失神を齎したのか、地霊の険しい顔が、それが突如現れて何事かを囁いたのか、後年、第八交響曲第一楽章を閉じたもの、ブルックナーが我と我が響きの幻想に震撼されて、「これぞ死の時計だ。容赦なく打ち続ける、一切が果て尽くすまで」と片言に漏らしたようなことを。この父の死ほどに、意識を失わせるほどに彼を震撼動揺させたものは、ブルックナーの人生を通じて、絶えて他にはなかつた。」

大地が割れて、そこから現れた地霊の相貌はまさしくあらゆる形容を超えた、五感に捉え切れないものであつたと想像するばかりだが、大地というこの上なく堅固なものが揺れ動く地震から我々は学ぶことに疎いのか。見たことが

ないものへの想像力の欠如をヴォータンがフリッカに誇るのは、ヴァルキューレ第二幕では言い訳の文脈に掬い取られて埋もれ、薄められてしまおうとしても、未知のものに驚き畏れるブルックナーの曇りなき幼子のまなこが、新たな次元に開眼する機縁の一齣をここに認めるに吝かでない。レルケは、ブルックナーにとっては地上にあってなお神と奉る楽劇創始者に触れて語る、「爾余の如何なる地上の人士とも比べようもなく敬愛したヴァーグナーの計報ですら、彼に与えた衝撃はまだしも穏やかなものであった。既に彼は〈non confundar in aeternum〉——我はとこしなえに頽れることなし——の境地に到達していたのである。斯かる慰めは、先だつて教会の為に歌われたが、此処に及んで第七交響曲のアダージオ冒頭から据えられ、また楽章を結ぶさ中に悲報が進ったときには、ブルックナーの両のまなこから涙が解き放たれたように滂沱と溢れ出たのであった…なんと私はそこで泣いたことか、ああ、なんと泣いたことか！」

先の永久不惑を歌い上げるラテン語の歌詞が、すなわち《テ・デウム》を結ぶ、掉尾を飾るものであることは、後に終曲を果たさずに終わった未完の第九交響曲の、その欠落した終曲の補完役をこの宗教合唱曲に委ねたこと、そこに込められた音楽家の遺志、あらためてそれを考えさせる。同じモチーフが宗教曲と交響曲とでかほどに明暗を異にするとなると、永久不惑の境地は、あるいは宗教曲の中でこそその分を守り得るのであって、それは欣求の合わされた手のようなものではないか。父の死の衝撃は、此処に触れられている第八交響曲の異様な冒頭楽章末尾、はたまた未完の第九に尚も、というより益々以て、大地にぽっかりと口を開けた火口或いはせめてその残滓のクレーターの微を刻み込んでいるのではないか。

閑話休題、レルケはつづけてまた父の死にはなしを戻す。

「この世からの父の決別は彼に初めて、逃れ難いある秩序の不可解なことを目の当たりに示すものであった。彼岸

へ向かつて彼我の間に口を開けた奈落はなお恐ろしい空虚を見せているようだった。これまでも彼は臨終の秘跡を授けるところで死にゆく人々を目にしたことはあつたが…ここで初めて、まだ見たことのない世界の夜を目の当たりにしたのだ。のみならず父のこの死は彼から、親の家という恵みをずたずたに引き裂いて奪ってしまったのである—— というのもこればかりは植え替えるわけにはいかないものだから—— また同時にまだ残りのある子供時代というものまで。運命は彼に向つて語つたのだ…注視して見るがよい！ 運命は彼を先ずは極端へと引き裂いた、華々しさと儉しさとの両極端へと。どちらも、若しともに実現したいと思えば、おとぎ話に見えてくる代物であるが。」

さて、六月の九日になつて、弟のイグナツ・ブルックナーが父を埋葬した。「金曜日」のことになる。墓碑には「アントン・ブルックナー／殿／学校教師。／一八三七年六月七日。／享年四十六歳。」等々と刻まれた。

エンス教区の学校教育管区監督（J. P. フォアブフナー）からリンツの司教枢機卿会議に宛てた手紙には、アントン・ブルックナー・シニアの死に就いて、また学校助手ヨーゼフ・パイター及びペアファールに就いて記されている。過酷な運命は斯くして弱冠十三歳足らずの少年に父の職責を背負わせるという荒業を敢行した。既に未だ父ブルックナーが瀕死の床に病を養っている頃から、息子アントンには学校と教会の仕事の義務が課せられたのである。人生初の重責を如何に苦勞して果たしていたか、生徒であり且つ同僚でもあつたというアンスフェルデンのすでに隠居の身を愉しんでいた齢八十という老農夫が伝えるその一端に耳傾けるなら、曰く、「あの方は見事に柔軟で拘らず、それでいつだつて陽気でした。くよくよ悩むなんてことはありやしない。何か御自分でへまをやらかしたりしたつて、そんなことはへっちゃらでした。先生としては厳しかった。だから成績を少し甘くしてくれても、寄つてく友達はいなかった。よその土地から来た子にはおぼおぼして打ち解けませんでした。教会ではもう十歳の時から弾いてました。年食う必要なかなかつたんだ。大物になるだろうつて、すぐ分かりましたよ。午前中は忙しかつたけ

ど、夕方くらいになれば雄山羊とやって来て乗ったりするのが好きでした。・・・野良仕事なんか好きじゃなかった。いっだって頭ん中は音楽でいっぱい・・・塞いだ気分の時は喇叭を吹いたりしました。音楽は何でもかでも本当に上手だった。あんなのはまったく見たこともない」等々、等々。

Chronologie Bd.1. S.25f.

Göllerich Bd.1. S.115ff.

http://www.bruckner-online.at/?page_id=1928 (20230613ac)

<https://www.projekt-gutenberg.org/loerke/bruckner/chap002.html> (2230513access)

七・八

一八三七年七月八日金曜日の皆既日食、そのアーダルベルト・シュティフターによる記述は忘れ難い。ささやかな一つの天変地異の、今でこそ4K乃至8Kの高精細画像を動員されるかもしれない、とはいえこちらは文字というつましきメディアに拠る記録ながら、或はそれ故にこそ、なお爾余の追隨を許さないものがある。

「五十年間親しく知りながら、五十一年目にしてその内容の重さと怖ろしさに驚愕するような事柄があるものだ。私にとつて、一八四二年七月八日の早朝ウィーンできわめつきの好天の空に我々が目の当たりにした皆既日食がまさにそうであつた」。こう説き起こされる文章は、つづけて太陽と地球の間に月が侵入して陽光を遮り円錐状の影を生じさせる、と天文学的物理学幾何学的な説明文を提示して、地上からの眺めとしては徐々に日輪を月影が犯して、ついに全部を覆い尽くすと、新月ならぬ太陽の黒円が訪れる、といったようなことを述べるが、これまた説明であつて、描写ではない。「ところが、今それが実際に起こつてみると、町全体を見渡せる展望台の上高く立つてこの現象を我が目で目の当たりにすると、そこに生じたものは、もとより寝ても覚めても今まで思い描いていたとは全く別物であつた、この不思議を見たことのない何びとにも思いもよるべくもないものであつた」。つまりは説明を超えた、説明の甲斐のない、常の想像、はたまた把握の外のものであつて、「これほどまでに震撼され、畏怖と崇高に震えたことは、我が全生涯でも決して決してなかつた。まさしくそのような二分間であつた。恰もそれは、ほかならず神がこのときばかりははっきりと分かる御言葉を話され、それが私にも分かつた、かのようにだつた」。つまりは日常茶飯事を超えた超常現象、普段の言葉では捉えられない、並の形容の埒外の領域、そこに発せられて鳴り響く神韻縹渺

たる、恰も彼岸から渡つて来る妙なる密語、あるいは被造物の受容能力を容赦せず響もす大音声、それがまた聞き届けられる言語と感得されたというのは面白い。さまざまの文脈すなわちコンテクストの網目に支えられてこそ意を伝え得る常の言葉の対極か。地上の千々に入り乱れた混信のさ中から、色々に関係づけられ、選り分けられ拾い出されてようやく意味を成す、それとてまた時々刻々の変移遷移に委ねられ、その時々都合によって、当事者同士の意思疎通を齎すだけの、言ってみれば相対的な遣り取り、そんなものから一頭地を抜けた絶対の呪文の明快さであったかもしれない、シユティフターの耳に聞き届けられた神の言葉とは。

「それは斯くも単純なことであつた」と、続く段落では、先の幾何学的物理学的天文学的説明と同工委曲の原理説明を、それが展開される場の宇宙的規模の尺度に触れつつ差し挟み、また次段では、斯かる現象が、千を千倍した迂遠な時間の昔から、今まさにこの時点で起こるべく神意によって定められていたこと、それをまた人知が学習し研究した果に見出した成果を讃仰し、その間にも所定の瞬間が近づきつつあることに注意を喚起する。これがリアルタイムのドキュメントであることを示しているのか。

いよいよ迫る成就の瞬間をまじかに控えて、観察者は、「これらの天体が存在してまたこの現象が存在するが故に、私が存在するのではない、そうではなくして、まさに今この瞬間にも「それを見ている」君等の心が震えを訴えるが故に、またこの心が恐ろしくて震えるにもかかわらず偉大だと感じるが故である」と述べて、「獣は畏れた、人間は祈つた」とこの段を結んでいるのは、意味深長というべきか。被造物をすべて均並に扱うのではない所に教養上の限度が垣間見えるのか。

ここまでを前置きとして、「これからの何行かを費やして試みたい、かの瞬間に揃つて天に向けられていた千の眼に代わつて、その映像を、また揃つて鼓動していた千の心臓に代わつて、その感得したところを辿り描いて定着して

みようと試みたい、弱き人間のペンがそもそもなし得る限り」と、ここから件の瞬間の描写を始めるのである。即ち、一八四二年七月八日午前五時五二分九秒から一分五七秒間ほどの事象で、観察場所は、ウィーン、ザイテンシュテッテンガッセ二番の、コルンホイスルトウムであった。

シュティフターは一八六八年一月二八日に亡くなるが、かねてから肝臓を患い、折しも重い感冒に罹って回復途上だったらしい。その二日前の二六日夜に、妻アマリーエがしばし部屋を空けた間に、剃刀で頸動脈を切ったことが死因となった。自殺とされてきたが異論もあり、そちらに拠れば、誤って負った怪我であったとされるが、故人のデスマスクを取った後、頸部をくるむように紙テープを当てたのは弔問者の目から傷を隠すためだったか。翌二九日リンツでの埋葬葬儀に際しても死因はもちろん伏せられて手兵《フロージン》を率いて合唱指揮にあたったのがアントン・ブルックナーであった。シュティフター没後一五〇周年の《プレッセ》紙（二〇一八年一月二二日）には、「リントの葬儀にはアントン・ブルックナー某が合唱隊を指揮した」と恰も名も無き人のような扱いでその名が記されているが、これは敢えてした冗談でもあったか。

一八三七年七月初めには、前月七日に父アントンの死去によってブルックナー一家が退去を余儀なくされた旧居に後任が入居、長子アントンは当面、縁戚のヴァイスの許に、以下の子供たちを連れて母は姑の許へと分散転居したが、同七月七日付で、封建領主時代からの禁帯出の記録簿に、母テレジア・ブルックナーが妊娠している可能性への言及がある。「遺児たち。寡婦は、自分が亡夫の子種を身籠っているかもしれない可能性を認めている」。

一八五八年七月十二日月曜日にはブルックナーにウィーンへの門戸を開いたピアリステン教会でのオルガンの試験に臨んだが、シュパイデル、ヴァインヴルム、同教会オルガニストのシュトイバーと師ゼヒターの錚々たる面々の前

での試験に合格して、ゼヒターからめでたく合格証明を授けられた、「成績証明、アントン・ブルックナー氏はオルガニストとして天与の恵まれた体格の傍ら、勤勉なる学習研究、数多の実演経験、またそれらによって培われた練達を、主題の前奏と展開に於いて明示され、これを以て最も優れたオルガニストに数えられ得ると、署名人は自筆署名と押印を以て証明するもの也」。

<https://abcd.acdh-dev.oeaw.ac.at/archiv/event/detail/185807125/>

<https://www.projekt-gutenberg.org/stifter/sonnenf/sonnenf.html>

<https://www.diepresse.com/5357434/adalbert-stifter-mit-filzpataschen-im-eisregen-der-welt>

九

一八二九年九月十七日の木曜日にアンスフェルデンの老司祭ヨーゼフ・グラープマーが享年七八歳で身罷つたが、終油の秘蹟を受けた後でなお、幼きアントン・ブルックナーを枕許に招いてわざわざ祝福を授けたと伝えられる。

祖父以来の家業といふべきか、早世した父に倣つてか、所定の天職と心得てそれ以外の選択肢が視野に入らなかつたか、教職を継ぐこととなる。その為にリンツで教職課程とともに和声学とオルガンの研修を積むが、それに先立つて、父の死とともに縁あつてザンクト・フロリアンの少年合唱隊に入つてもいる。修行を了えて資格獲得が成ると四一年からヴィントハークに助教師として赴任して足掛け三年、親しく交わり樂興を共にしたジユチカ家の面々のような付き合ひはあつたものの、肝心の職場の学校にはやや窮屈を覚え、また学校側からは奔放に過ぎる等と批判を受けることなきにしも非ず、ホーフマンスタールの作品等に登場するウイーンの淑女らがしばしば持ち出すお定まりの愁訴（ミグレネ（片頭痛）を此処で初めてうつつたえたとか。また、当地の司祭の告解リスト中のメモにはブルックナーの名に言及して前任者のことを同司祭が新任のブルックナーに忠告する記述が、守秘義務にもかかわらず残されているという。

それやこれやの噂が風の便りに伝わつたものか、四二年の年も押し詰まつた頃、ザンクト・フロリアンの修道院長ミヒャエル・アルネートがヴィントハークに足を運び、先の告解の件と同じ司祭シユヴィングハイムプ「シユヴィングハイム」、及び教師フランツ・フックスと会うと、両者は口々にブルックナーの態度を難ずる有様に、事情を察したアルネートはブルックナーをヴィントハークからクロンシュトルフへと移動させるべく算段した

ことは以前にも触れたが、四三年に移って同じく足掛け三年を過ごしたクロンシュトルフの地は前任地にひきかえ、得難い出会いにも恵まれて幸多い期間であった。就中、レオポルド・フォン・ツエネッティに教えを請うべく週三度エンスに出かけたが、ブルックナーの熱中ぶりがうかがえる。そこで取り上げられたのは、理論書ではテュルクの通奏低音演奏に就てのもの、また同じ著者のオルガニストの義務に就てのもの、また古今の作品中から俎上に載せられたのは、バッハのコラールや平均律、等々の題名が伝えられている。ツエネッティを通して初めて知ったものに、ヴァンハルトと、マイの、いずれも通奏低音に関する著作、またミヒャエル・ハイドンの『総譜基礎』と、後に師事するゼヒターの『実践通奏低音修練』があった。ところでツエネッティの遺品には、モーツァルトのへ長調ミサ(KV192)、ハイドンのネルソン・ミサ、ミヒャエル・ハイドンの昇階唱、ベートーヴェンのハ長調ミサ、等々、孰れも写本の形で残され、加えてヨーゼフ・ハイドンの三十余りの作品がみつかっているという。

四四年の九月に入るに先立って、クロンシュトルフのシッフナーと、ザンクト・フロリアンのロイトゲープがエンスで接触したのはおそらくブルックナー転任の準備であったか。

四五年の九月二五日の木曜にクナウアー司祭が証明書起草する。

「クロンシュトルフの司祭アロイス・クナウアーに拠る証明書

教師補助アントン・ブルックナー氏、アンスフェルデン Tr Kr 「トラウン教区圏」、二一歳が、ザンクト・フロリアンの学校の教師補助へと移籍することを司祭として認可するもの也。

同氏はほぼ二年と九ヶ月に及ぶ当地滞在勤務の間、甚だ熱心且つ教授法を心得た教師として、週日並びに土曜日曜にも正教師の代理を完璧にこなし、青少年子女の訓育及び宗教道徳を共に涵養する者として、並びにまた教会音楽の甚だ知見の広い実演能力ある指導者として、また建設的かつ正確きわまる教会聖堂設備の整備実践者として、自身の

生活態度に於いては宗教的徳的なキリスト教徒として、即ち署名人に対する関係に於いては、伝教師として司牧者として、身を挺しての公明正大さを具えていることを証明するもの也。

同人は毎回の教員試験でも亦、尊敬すべき学校区監督から満足の評定を獲得しており、署名人は同人を手離したくないが、誉ある本証明書が、同人に全面的かつ最上の推薦を授けることが叶うならば、まさにそれこそ衷心からの喜び也。

クローンシュトルフ司教職、一八四五年九月二五日。

アロイス・クナウアー、
司教、且つ、伝教師。」

対して同日、ザンクト・フロリアン採用通知が下される。署名人は、J. P. フォアブーフナー。ニーダーノイキルヒェンの地名が記されているが、ここはエンスの学校管区であった。

「採用令

クローンシュトルフ司教座学校からザンクト・フロリアン司教座且つ市立学校へ、主席司教区エンス在の両校に奉職していたアントン・ブルックナー氏に、本令を以て署名人たる学校管区監督から、職場移転と第一組織教員補助として、ザンクト・フロリアン司教座学校にその二番目に大きな教室を以下の要請と共に着任すべく指令が授けられる。すなわちこれまでクローンシュトルフで日々投入していた担当科目を教える際の勤勉、秩序への愛情、練達、また子供の扱い方に、これまでの実績に匹敵するのみならずそれを凌駕するほどのものを發揮し、またこれまで示してきた善良な素行と結び付け、斯くしてより広範囲の愛顧と高評価に相応しくあり続けるべく精勵されたい。

ニーダーノイキルヒェン主席司教区並びに学校教区監督

八四五年九月二五日。

J. P. フォアブーフナー C R G、

主席司教区監督。」

教師補助ブルックナー、ハンス・シュレーガーの後任、は教師一家ボーグナー家に住まいして、年俸三六グルデンを得る。

彼は一八四九年まで聖堂オルガニスト補助を勤める。

十

一八四五年十月晦日の金曜日にザンクト・フローリアン修道院経理課の元台帳に給与受給者としてブルックナーの名前が初めて登場する。すなわち九月二五日からこの三二日までの分として三ゲルデン三六クロイツァーとの記載が残されているという。

一八五三年十月十五日の土曜日にザンクト・フローリアンの帝室王室区立裁判所から、ブルックナーは彼の妹「学校教員の娘アンナ・マリア・ブルックナー」の後見人に任命された。その書面に曰く、「当区立裁判所は貴殿を、アンスフェルデンの学校教員の娘アンナ・マリア・ブルックナーの後見人として任命することを認定した。この役目に於いて貴殿に、上記のとおり貴殿の被後見人の代理を、裁判所内外に於いて勤め、斯かる役目を忠実且つ勤勉に果たし、毎年末には後見人としての経費明細の届出を励行し、若しくは経費明細の入手が叶わない場合は、少なくとも被後見人の費用一覧を添付の所定の書式に従って毎年提出し、且つ万事に於いて法律の規定に従うことを義務として負うものとする。

斯かる義務の宣誓の為に、本年十月二二日午前八時に当帝室王室区立裁判所に出頭されたい」と。

翌五四年の十月四日の水曜日には《タントウム・エルゴ (WABA)》がザンクト・フローリアンで初演された。

同九日の月曜には、ウィーンで行われたオルガン演奏試験に参加したブルックナーは催しの掉尾を飾るべく登壇して二重フーガを即興に披露したという。その成績証明書をイグナツ・アースマイアが草して曰く、「署名者は是を以て、ザンクト・フローリアン修道院オルガニスト、アントン・ブルックナー氏が臨んだ試験に於いて熟達老練のオル

ガニストであることを明らかにした旨証明するもの也。

J. イグナツ・アースマイア、宮廷楽長。

ウイーン、一八五四年十月九日。」

同三一日付を以てブルックナーは下級教師に着任するが、同年四月末日には未だ教師補助の身分であったから早い昇格といつてよいか。ザンクト・フローリアン修道院経理課から、十一月に始まり十月に終わる所謂〈軍事暦〉での最終四半期つまり八月から十月までの期間分として九グルデンを供されたことをブルックナー本人が確認しているが、また臨時の聖堂オルガン奏者として二十グルデンを受け取り、加えて三番目には少年合唱団の個人授業に対して九グルデンを得た領収書が残されている。

一八五五年十月二十日の土曜の日付でザンクト・フローリアンの合唱隊の名簿が残されているが、そこにはブルックナーと並んで、後にその後任となるオルガニスト、ヨーゼフ・ザイベアルの名前が記載されている。この人は一八三六年ザンクト・ゴットハルト生まれというからブルックナーより一回り若く、学校教師の息子というから似たような境遇であったか。教師補助の要員としてザンクト・フローリアンへ来たが、暫くの間、修道院長代理のフリードリヒ・マイアの身近に仕えた。ザイテンシュテッテンで修道オルガニストのプファイファーの許で対位法を学んだ経歴、オルガニストとして名を知られるに至るのみならず、抜きん出たテノール歌手としても活躍し、数多の作曲をものしたが、愛すべき人柄の明朗な社交性にも恵まれていた由。一週間ほど後の二九日の月曜にブルックナーはCh.r.コッホの『作曲教本』をザイベアルに贈ったが、これはそもそも、嘗てアロイス・シュテルツハッカーから譲り受けたものであった。

一八五六年十月二日のブルックナーの司教区庁宛ての手紙は、ルデイギア司教から口頭で、リンツの聖堂オルガンの

現状に就いて尋ねられたことへの返事であった。

「高貴なる司教区庁御中！」

忝くも司教殿下より、小生即ちこの上なき恭順を以て帰依いたしております署名人は口頭で要請を承りました故を以て、聖堂オルガンの現状に就き、何らかの（必要不可欠の）修繕の為に、弱冠の御説明を申し上げる次第であります。斯くて小生といたしましては、以下の点まで発言を余儀なくされるところであります…即ち、

第一には、オルガン全体の埃を隈なく除去すること、

第二には、音栓が目下の状態では、その多くが狂いを生じておりますが、また全く使用に堪えないものも一部には存在しますので、良好に動く状態にしなければなりません。

第三に、機械構造が連結の際にすっかり変更されるか、若しくは該当する音栓操作に支障を来さず動かせるような方式に改善されなければなりません。そうなつてこそ初めてこのオルガンは全力を発揮できるのであります。

リンツ、一八五六年十月二日

アントン・ブルックナー

聖堂オルガニスト」。

おそらく一八五五年以前からブルックナーのオルガンを耳にしたことがあつたらしいルディギア司教とはどんな人物であつたか。フォアアールベルク州はバルテネンに一八一一年に生を享けたフランツ・ヨーゼフ・ルディギアは、三五年に聖職者の職に就き、先ずは故郷の州のヴァンダンに、続いてビューアスで司牧を勤める。その後ウィーンのアウグステイヌス教会の高等教育機関フリンタネウムで研鑽を積み三九年にブリクセンで教会史と教会権の教授の地位に就く。四五年にフリンタネウムの長としてウィーンへ戻り宮廷司祭を兼ねる。フランツ・ヨーゼフ一世及びその

弟マクシミリアンの師をも務めた。五二年からローマカトリックのリンツ司教の座にあったが、その職責からオーバーストリア州議会議員の地位を兼務した。

ブルックナーにとってかけがえない支援者であったが、音楽家のことが司教の目に入り始めてまだ間もない頃、その求めに応じて忌憚なく判断を表明した報告書を認めた次第。その率直な文言が注文主の信頼を高めこそすれ、いささかも懸念を招いたり機嫌を損ねたりすることがなかったのは幸いであった。

その二日後、週末十月四日の土曜には〈フォルクスガルテン〉で《フロージン》の面々が夕刻に歓談の一時を愉しんだが、週開けて十月七日の火曜、聖母マリアを祝うロザリオの祝日に、『アヴェ・マリア』（WAB5）がザンクト・フローリアンで初演されている。

Chronologie I Bd. S.46, S.82f, S.66, S.69f.

Göllerich. Bd II/1. S.148f, S.238f.

https://abcdacdh-dev.oaw.ac.at/results/?ft_search=Oktober

十一

「六年間、つまり五五年から六一一年までわたしはゼヒターに就いて、その間彼に見て貰うために日に七時間勉強したのだ」と弟子で後に師の伝記をものするゲレリヒに、ブルックナーが述懐したのは一八八五年のことか、此処に名の上がった楽理の権威ゼヒターは自分の新たな弟子の意味を直ちに見抜いて、ザンクト・フローリアンですでにブルックナーが達成していた地位及びそれが彼のさらなる発展に供し得るより以上のさらに大きな運を勝取るべく努力するようにと勧めていた。斯かる提言あるいは忠告は彼の内心にあきらかな転回を齎したが、すなわち進取の気性とともにある種の惑乱と不満と不安を掻き立て励起して、おかげでまたしてもひとしきり塞ぎの虫と闘わなければならなかったのである。

「わたしは祝祭日にはいつだってひたすら《カンタータ》やありとあらゆる雑曲を作らなければならなかったが、それ以外の時はただただ使用人として働いていたから、食事も使用人用の席で摂らざるを得ず、考えられる限りの粗末な扱いを受けていたのだ」とゲレリヒは師の述懐を伝記に続けて収録しているが、「そんなことからわたしはすっかり塞ぎの虫にとり憑かれてしまった」。

「ただし母はわたしにいつもこう言い聞かせて呉れた、つまり、私は自分のそんな悩みを口外してはいけない、ただ自分一人の頭の中にだけ仕舞って置くように、と」。

「またある時わたしがすっかりふさぎ込んでいた時のことだ、修道院長がこう仰った、〈そんなに塞ぎ込んでいる者は好かん、我々はお前を追い出してしまおうぞ〉、と。だからわたしは前にもまして悲しくなった。ところがすぐまたこ

う仰ったのだ、〈私はお前のことは好きだよ〉、と」。

こんな状況下ではあったが、打ちひしがれた音楽家は、修道院長には内緒でオルミユッツの聖堂オルガニストのポストに応募して、良心の呵責に苦しみながらしばらくを過ごし、それからそのことをおぼろげに告げると、「なんだ」と修道院長は金切声を上げて、「チェコ人どものところへなんぞ行くというのか？ いったい今までチェコ人がドイツ人に何かいいことでもして呉れたためしがあるとしても聞いたか？ だが兎も角今は先ず、儂が靴を脱ぐのを手伝え」と音楽家を打ちのめしたから、震えながらブルックナーは言いつけどおりにするほかはなかったという。無事靴を脱ぎ終えた修道院長はこう言葉をつづけたそう、*「さて、そうすると今また儂に知らせずにお前は何か仕出かすのか？」* — 「けっして、そのようなことは御座いませぬ」と怯え切った音楽家はどもりどもり言うのが精いっぱいであった由。

オルミユッツのポスト獲得が不首尾に終わったのは、ブルックナーが応募するという噂に恐れをなした彼の地の聖堂側で、当初の予定の応募締切りを一月繰り上げて、支配的地位にあった某の縁戚筋に当たる奏者を早々と採用してしまつたからだという。

運命の定めはまた別であつた、とゲレリヒは記す。すなわち、

一八五五年十一月十三日の朝、ザンクト・フローリアンにブルックナーは当時たいへん有名だったオルガン及びピアノ調律師アルフレート・ユストのリンツからの訪問を出迎えた。というのも減多にオルガンから離れることになつたブルックナーが、ちょうどこの時はリンツを訪れて留守に相違ないとユストは思つたからであつた、という。折しもこの日には、リンツでオルガン競演試験が開催されており、その目的とは、同聖堂の市教区司教オルガン奏者ヴェンツェル・プランクホーファーが一八五五年十一月九日に逝去した為の空席を埋めることであつた。

吃驚仰天したのはユストの方であつた。というのも、当時すでに国一番のオルガニストと目されていたブルックナーが、この競演試験に参加しないと認めざるを得なかつたからである。ユストはすぐにブルックナーに向かつて、是非とも参加してほしい旨こんこんと言つて聞かせて、長らく説得にこれ勤めた甲斐あつてか、後者は「短すぎる上着」を羽織つて、すぐ次の手近の連絡便でリンツへ向かつたという。

先ずブルックナーが向かつた先は嘗ての師デュルンベルガーのところであつたが、この人が当競演試験の主催者であつた。久しぶりに弟子の顔を見るなり、「やあ、トンネアル、今日此処へ来てくれたとは嬉しいことだ。君も聖堂オルガニストの地位に応募してくれるんだね。」——ブルックナーは答えて曰く、「いえ、いえ、何てことを思いつかれるんですか、先生！ あちらのザンクト・フローリアンではそんなこと一言も申し上げておりません。先生はまた何てことをお考えになるんでしょうか、わたしがまさか貴方に隠れてこそこそと何であれ応募を企てるだなんて！」「それなら私が今そうすることにしてやろう」と、デュルンベルガーはそれに応じ、午後に聖堂へとブルックナーを連れて行つた。そこでオルガンの競演試験が行われたのである。開始直前にデュルンベルガーが主題を一つ書き記して示したが、それに基づいて応募者が演奏するのである。応募者のハイン氏とランツ氏が演奏している間、ブルックナーは跪いて祈りを捧げていた。ランツは颯爽とオルガンに上がつてフーガを弾き始めたが、それは与えられた主題に拠るものではなかつた。「お止めなさい」とデュルンベルガーが言つた、「誰だつて覚えられる主題ですよ」。最後の最後までブルックナーは弾く決心がつかないでいた。ついに彼の師が恰も命令するような口調で言い渡した、「トンネアル、君は弾かなきゃならん！」それでようやく、彼はオルガンに上がつて、所定の主題を先ずはごく素朴に弾いた、内気なほど、ごく慎ましく、それからだんだんと盛り上がつて没入し、やがて壮大なフーガを築くに至つた。彼の奏樂は余りに圧倒的だつたから、並居る試験官たち一同の厳格な鹿爪らしさは吹き飛んで、皆が皆心を奪われて

しまった。わけても誇り高いことにかけては一頭地を抜いていたエンゲルベルト・ランツは、感動に拉去られて、手を取り、こう告白した、「君という人ときたら、こりやもう万人の死だ！」まさにこの言葉は、音楽家の作品に就いてこれから先もたびたびその真価が発揮されることになるが、それまた時として正直に口に出して言うことを憚りたくなること無きにも非ず、とは伝記の書き手の感慨でもあるうか。

Göllerich: ABBdII/1. S.187ff.

Chronologie:Bd.2 S.117

十二

一八五五年の十二月八日、即ち（無原罪の御宿り）の祝祭にブルックナーは、リンツの旧大聖堂で催された盛式ミサのオルガニストを初めて勤めることとなった。やがてこの州都に移ることになるが、当初は未だ屈託がなかったわけではない。つまりいつもながらの癖というべきか、何事にも自信満々で臨むというのとは正反対の性格が顔を出して、今までのザンクト・フローリアンの長閑な自然に取り囲まれた田園の暮らしから、それに比べて甚だ慌しい都市生活へと突入することに懸念を覚えること無きにしても非ず、逡巡していたところへ善意の勧奨の手紙が飛び込んで来た。

「やんごとなきお生まれの

ザンクト・フローリアンの下級教師

アントン・ブルックナー殿、

リンツ、八八五年十二月十七日

親愛なるブルックナー殿！

貴殿がリンツでのオルガニストの席をお望みでありながら、御自身で敢然とそれに踏み出されないと話をして日々耳にするに及び、小生驚いております。そのせいで期限を過ぎしてしまうようなことになりましたら、せっかくの席を貴殿は獲得できなくなりますよ。こんなもったいない地位を見逃してしまふようなことになるのか、全く理解に苦しむものであります。

のみならず小生、貴殿にこう申上げるのを我ながら義務と心得るものですが、貴殿は一旦誓ったことを果たすのに、正装の上着を着こんだもののその上着にボタンが一つ欠けていたのを襟巻を首のまわりに巻いて隠し、上履きを履いて現れたようなものですが、誰でも気が付きますよ。全く作法に適っておりません。貴殿の為に弁護致しました次第です。しかし二度とこんなことがありませんよう心掛けて下さい。そもそも、たびたび小生は貴殿にリンツへいらっしやいとお勧めしておりましたし、また祝宴の折々、人事に影響力ある面々に御紹介の労をとってきましたが、貴殿が目指されているところを達成しない内に、他の連中が先んじて歩を進めてしまふ、一方貴殿と言えはのうのと家から出ることもなく何にもしないでおられる、そんなふうにも心配しております。聖堂参事会員のシーダーマイアや市長とは是非とも交友を深めて下さらなければ。何より先ず、すぐにも願書の提出をして下さい。小生からの直言、御容赦下さいますよう、それにしても貴殿の能天気には腹立ちを覚える次第です。――時代情勢というものを貴殿はあまりにも御存じなさすぎます。

貴殿の友

F. d. A. : :]

最後の署名は、ゲレリヒの伝記では「解説不能」と、また全集版の書簡の巻では「F. R. d. s. t. m. p.」と辛うじて解説できる範囲で記載されているが、差出人がゲオルク・ルツケンシュタイナーであることは判明しているようで、これはブルックナーのザンクト・フローリアンでの教え子マリーの父親であった。父兄として娘の師とは直言の可能な親交を結ぶ人であったことが窺われる。

つづけて翌十八日またしてもリンツから一通来信。

「拝啓

本状を以て貴殿に御注意申し上げますが、大聖堂並びに市教区教会オルガニスト決定の為の願書の提出期限が今月末日に迫っております。— 貴殿は目下のところこれに関心を示されず、貴殿からの願書提出は御座いませんが、本状を以て提出期限を過ぎられませんよう、また貴殿の本件願書に就き然るべく書面にて御通知下さいますよう、御注意を喚起致します次第であります。なお御忠告申し上げますが、貴殿が市教区司教祝下及び市長閣下を祝宴にて（上着、上履き、襟巻などは無しで）出来得る限り早く表敬訪問頂ければ幸いに存じます。これにて貴殿が目標の三分の一ほどを逃さずに済む為です。— リンツにお出での節には、なにとぞ州議会議員ルッケンシュタイナー閣下の御好意ある尽力を無にしませんよう、閣下は貴殿の為に上記の面々にも御自身でいろいろお取り計らい下さり、また貴殿の為に弁を尽くして下さいましょう。

以上、貴殿の為にこそ意を尽くして申上げましたことを保証して摺筆とさせていただきます、敬具

貴殿の

この上なく御為を慮ります

Jos. ヴァイヒャルト

教会管理人

本状は、余人の誰にも知られぬよう、直ちに破棄願います。」

ところがこの書状すらもが、願書提出の決断を促すわけに行かなかつた。

修道院長マイアの切迫した説得あつてようやくブルックナーは一步を踏み出すに至るが、それとて、リンツ奉職が不首尾に終わるときの用心として、ザンクト・フローリアンの後任人事までは、万一の場合は舞い戻れるように、二

年間の猶予を保証されて初めて決心がついたのである。つまりは、採用されてもリンツの地位がそのまま居続けるに堪えがたいものであった場合には、つまり都會のあらゆるものへの反感や不信に抗って踏み切った定職への願書提出するにあたって、新天地の境遇に馴染み切れない場合にはふたたび戻れる古巣を失いたくない、言い換えればそれほどまでにザンクト・フロリアンは音楽家にとって掛替えのない夢の故郷であったということが領けよう。後年、帝都ウィーンに辿り着いてからも、夏の休暇は古巣へ戻る習慣をついぞ已めることがなかったのも宜なるかな。

二二日にザンクト・フロリアンで最後の俸給を受け取る。

新任地リンツへ「十二月二四日に決定的に引越」して、最初の本格的な登場は、クリスマスのミサで深夜十二時に始まった。「大聖堂教会の隣」に位置する「市教区教会のお勤め」を引き継いだのである。

二五日に市教区教会のオルガンに就いて

の所見。「署名人は要請頂いた故を以て、当地市教区教会の新オルガンの目下の状態に就き以下の通り報告致します、手鍵盤及び足鍵盤、また機構、及びまたイントネーションに就いても、当オルガンが重大な修理を要すること、また送風にも問題の可能性、以上。

アントン・ブルックナー

大聖堂 及び 市教区教会

暫定オルガニスト」

此処に新オルガンとあるのは一八五二年ザルツブルクのオルガン製作者ルートヴィヒ・モーザー建造になるもの。

Göllerich. Bd.II/1. S.193f.

A.B.Briefe. Bd.I S.5ff.

追記

ブルックナーの交響曲は弦楽器の最弱音のさざめき囁く言うなれば音以前の音、かかる名状しがたい響きを以て始まる、露払いさながらに、所謂原始霧の顫動が、いわば日常界の諸行無常の雑音を払拭する役目を担うものか。やがてそれが暗れ、視界がひらけ、それを齎すためにあつたかともおぼしき有象無象の幻が去ると、やおら出現する太虚。その本性を問われても応え得ない無窮の青空は、またその在処を予知も叶わない、意表を衝いたところに不図あらわれるかもしれない。曇りなき心眼に恵まれてこそ、またその機に恵まれてこそ出現する青空の色、つまりパラジユの言う、ほんとうの空色、に通じるものではないか。

以上、本稿の題名の和文と欧文についてあらずもがなの追記として。

文献(本文中に略号で指示したものに限る。爾余のものは段落末尾ごとに記載。)

- Bruckner, Anton: Briefe 1852-1886 (=A. B. Briefe)
Hellsberg, Clemens: Demokrateie der Könige. Die Geschichte der Wiener Philharmoniker.
Zürich-Wien-Mainz 1992 (=Hellsberg)
Scheder, Franz: Anton Bruckner Chronologie. Tutzing 1996 (=Chronologie)
Göllerich, August Auer, Max: Anton Bruckner. Regensburg 1936 1974 (=Göllerich)
Wessely, Othmar (Hr.g.): Bruckner-Studien. Wien 1975 (=Bruckner-Studien)
Anton Bruckner. Dokumente & Studien. Hr.g. v. Grاسبberger, Franz. 2. Bd. Graz 1980 (=Dokumente)
Decey, Ernst: Bruckner. Berlin/Leipzig 1921 (=Decey)
Billroth, Otto Gottlieb: Billroth und Brahms im Briefwechsel. Berlin und Wien 1935 1991 (=Billroth)
Brahms, Johannes, Moser, Andreas (Hr.g.): Johannes Brahms im Briefwechsel mit Joseph Joachim. Berlin 1908 (=Joachim)
Litzmann, Berthold: Clara Schumann. Ein Künstlerleben. Dritter Band. Leipzig 1910 (=Clara Schumann)
Walker, Franck: Hugo Wolf. (ins Deutsch: Schey, Witold). Graz 1953

(すなが・つねお 名誉教授)